

例) 山形市「佐藤屋」のし梅 無人販売機³



人口減少がいち早く続く東北をどうとらえるか。全国的に見ても、人口減少が進む東北の状況を知り、様々な「社会実験」を行うことは、10年先、20年先の日本を先取りすることであり、その課題解決を図ることは、将来の日本の課題解決に繋がる。そのような思いを胸に、「地方創生」の本質を授業に取り込み、徹底的に学生たちと地方における幸福の本質を探索し続けてきた。今でこそ、全国で多くの「地方創生セミナー」が開かれているが、果たしてその地域の人々の収益や幸福に繋がっているのか、という名ばかりのものへの懸念も感じるようになった。また、例えば、地方創生の名の下にばらまかれている税金をいかに合法的に獲得するかということに堕していないかという厳しい視点も忘れてはならない。「地方創生」の定義をしっかりと認識せず、言葉のイメージだけで考えると、ゴールを見誤ってしまうこともありうるからである。

日本国内全体の人口については、2012年をピークに減少が始まり、少子高齢化社会での「集客」「拡大」を目的にした地方創生は、ゴールが見えない泥沼に陥りがちである。中央からの助成金を頼りとし、その場限りの集客では、その後の自発的な持続は期待できない。リピーターを期待したバラマキ企画も、2回目以降に実際にその費用を負担してまで訪れるかという視点が抜けていると、一度きりの集客で終わってしまう。集客をするにも、SNSで内輪にしか届いていないといった悪循環に

陥っている事業も多く存在している。

地方創生の定義とは何か。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局によると、『人口急減・超高齢化』という我が国が直面する大きな課題に対し、政府一体となって取り組み、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生することを目指し、人口減少を克服し、将来にわたって成長力を確保し、『活力ある日本社会』を維持するため、『稼ぐ地域をつくるとともに、安心して働けるようにする』『地方とのつながりを築き、地方への新しいひとの流れをつくる』『結婚・出産・子育ての希望をかなえる』『ひとが集う、安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくる』の基本目標と、『多様な人材の活躍を推進する』『新しい時代の流れを力にする』という諸目標の達成に向けた政策を柱としている⁴。

2. 福島県只見町の「縁結び」を軸とした地域活性化

地道な活動を続ける中、ありがたいことに山形県に加え、宮城県、青森県などの自治体から多くの産学連携案件の相談を頂き、現在は、福島県只見町より相談を受け、現地調査、事業展開を行なっている。

福島県の西端に位置する只見町は、日本有数の豪雪地帯である。約74,000ヘクタールの広大な面積の90%以上を山林原野が占め、人口は約3964人（2021年11月1日現在）、65歳以上の高齢者は47.2%（総務省統計局によれば、2021年9月15日時点での全国平均29.1%）となっている（尚、東京23区は約62,100ヘクタール）。

1910年以降から第二次大戦後にかけて本格化した只見川における水力発電構想により、巨大ダムの開発、それに伴う只見線敷設などにより沿線が開発されていったが、現在では過疎・高齢化が進んでいる。

類稀なるブナの原生林を有する只見町は、2014

年6月の「第26回MAB（人間と生物圏）計画国際調整理事会」にてユネスコエコパーク登録がなされた。原生的な自然環境と生物多様性を保護し、それらから得られる資源を持続可能な形で利活用することを通じて、社会経済的な発展を目指し、様々な取り組みを発信している。

2020年7月より、現地と連携を開始したが、折しも新型コロナウイルスの感染が拡大している中であり、当初は学生を交えたZoomでの質疑応答から開始し、只見線の復旧までの背景についてのレクチャーを受けた。JR只見線は、2011年7月の集中豪雨により、会津川口駅から只見駅の区間が運休しており、その再開通が2022年度中に控えている。不通となっている会津川口～只見間については、年間の運賃収入は約500万円程度。これに対して運行経費は3億を超えるとされ、このほぼ全額を、福島県と沿線自治体が負担するというリスクをとっての復旧である⁵。そのため、再開通後に期待される会津若松方面からの観光客を増やすために、新しい魅力発信を検討していた。その一つが、三石神社を軸とした縁結び事業である。2016年には、JR東日本の企画にて「縁結び列車」が運行され、海外からの観光客に対しても、「世界一ロマンティックなローカル路線⁶」として、海外でも新聞掲載⁷されるなど話題になっている。



(福島県生活環境部 只見線再開準備室HP)

感染拡大が落ち着いてきた2020年9月より、定期的に新潟県の小出駅経由で只見駅に入り、現地調査を続けている。三石神社は、奇岩をご神体として祀っている全国的にも珍しい神社であり、新たな縁結び事業についても、現在進行中である。既に、学生と共に様々なデザイン制作及びお土産商品や地元民芸品を活用したお守りの開発、ふるさと納税返礼品の新商品設定などを行っており、途中経過が福島民報やTV番組などで紹介され、再開通後の更なる展開を予定している。



(2021年4月26日 福島民報朝刊)

3. 二十三夜信仰と勢至菩薩

このような取り組みを進める中で、私が注目したのは、只見駅近くの「滝神社」にある「二十三夜塔」であった。



(二十三夜塔・滝神社・筆者撮影)

滝神社は、享保18年（1733）7月6日に上ノ原（現在の只見駅付近）に建立。大洪水による犠牲者を慰霊し、水神をおさめるために作られたとされ、明治30年に現在地へ移設されている⁸。私は以前から自宅近くにある「蘇峰公園」（東京都大田区）の入口口に鎮座する大きな石碑に注目していた。蘇峰公園は、徳富蘇峰（1863～1957）の旧宅を公園にしたものであり、入口近くに「サ三夜」と彫られた二十三夜塔が設置されている（「サ」は廿・二十を意味）。上部には日輪月輪も掘られており、裏面には明治17年（1884）8月23日の記載が確認出来る。



（二十三夜塔・蘇峰公園・筆者撮影）

その他、私の実家がある埼玉県さいたま市にも、地名としての「二十三夜」と二十三夜供養塔があ



（さいたま市南区太田窪・筆者撮影）



（さいたま市南区太田窪・筆者撮影）

り、山形市の東北芸術工科大学前にある「月山神社」にも「二十三夜供養塔」が存在する。



（二十三夜塔・山形市上桜田・筆者撮影）

二十三夜講とは、月の出を待ち祭る行事の一つで、これに参加する人々の集団を二十三夜講と呼ぶ。さいたま市の地名に関しては「地名はこの講に由来するものである。この行事は中世以来非常に盛んで、その講は全国的に行われていた。太田窪の場合には、北条氏と足利氏が争った時、この辺りから多くの農民が兵士として徴用され、彼らの身を案じたその家族たちが集まり、武運長久・安心立命を祈ったのが、月待講として行事化され

たとえられている。講は7月1日の夜6時頃から行われ、勢至菩薩を祀り観音経を唱える。かつては祈願堂があり、そこで講がもたれたそうだが、天保3年(1832年)に老朽化のため廃堂となった。代わりに石塔を建てたのが『二十三日供養塔』で、現在も産業道路近くに立っている」とある⁹。

その他、浦和駅近くには「調神社」(つきじんじゃ・地元では「つきのみやじんじゃ」と呼ばれている)があり、伊勢神宮へ納める貢(調)物を納めた倉庫群の中に創建されたことが由来とされているが、調(つき)の名が月と同じ読み方であり、「月」「うさぎ」「神の使い」が、月待信仰と結びついたようである。狛犬ではなく、兎の石像や彫物、絵馬など、「月とうさぎ」に因んだ神社が存在する。

その他、熊谷市の妻沼聖天山歓喜院を初め、埼玉県内各所にも二十三日供養塔を見つけることができ、いずれの場所においても、石碑近くにある灯籠には、月を模したものが彫刻されていることが多い。

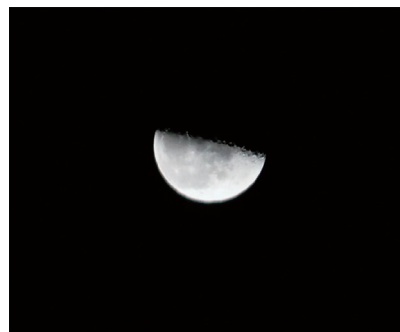


(二十三日塔・熊谷市 妻沼聖天山歓喜院・筆者撮影)

「月待信仰」とは、月の満ち欠けに伴い、月の出を待ち、月を祀る信仰である。例えば、祭神・本尊には、勢至菩薩、阿弥陀三尊、観音菩薩、月光菩薩、月天子、月読尊などがある。起源は不詳。三日月待・十六夜待・十七夜待・十九夜待・二十二夜待・二十三日待・二十六夜待などがあったが、特に二十三日待が盛んだった¹⁰。

二十三日は月齢では「下弦の月」であり、地平線に現れるのが深夜0時を回った頃である。山間部では、月が山の高さを超える時間を考慮すると午前1時前後となり、「下弦の月」が出る旧暦23日の夜に「講」として、人々が集まり、月の出を待ち、明け方まで飲食を共にしていたという。

只見町からの依頼は、「縁結び」についての町興しを新たに創り上げるということであったが、人々が毎月、二十三日に集まり、共に時間を過ごすという行事を想像するに、これこそが縁(えにし)を結ぶための重要な場と風習であったのではないかと考えるようになった。



(2021年12月27日午前1時・筆者撮影)

江戸時代以前の生活様式においては、現在の太陽暦ではなく、月の動きを基本とした旧暦(太陰太陽暦)即ち、月の満ち欠けの周期を暦として生活が営まれていた。一つの周期は、新月→上弦→満月→下弦→新月となり、新月を1日目として、15日目を「十五夜」、13日目を「十三夜」、そして23日目を「二十三日」となる。また、上弦(旧暦8日)と下弦(旧暦23日)時には、月・地球・太陽が直角に並び、太陰潮と太陽潮とが打ち消し合

うため小潮となり、穏やかな海となり、船を出すときの目安になるという。

水平線から上る下弦の月は、半円を下にして、まさに「船」を模したような形となり、先祖が船に乗って、戻ってくるようにも見える。下弦の月が輝くのは真夜中から日の出までであり、月が没する正午までは、白い半月を目にすることになる。

『江戸名所図会』には、「祭神、月読命一坐、本地勢至菩薩」と記載され、二十三夜において祀られているものは、「勢至菩薩」となっている。実際に供養塔と共に勢至菩薩の石仏が並んでいるケースが非常に多い¹¹。



(勢至菩薩像・二十三夜塔・只見町・筆者撮影)



(浄土宗ホームページより)

浄土宗において、「阿弥陀仏は観音菩薩（かんのんぼさつ）・勢至菩薩（せいしぼさつ）を従えている（阿弥陀三尊）」と説かれており、阿弥陀仏に向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩、そしてその左に法然上人像が置かれることが正式とされる。且つ、浄土宗開祖の法然上人の幼名は勢至丸であり、勢至菩薩の生まれ変わりという信仰も

存在する。

二十三夜塔は、長野県から関東、更には東北エリアへと広く分布しており、只見町へは2ヶ月に1回の頻度で訪問していたが、その都度、意図せずとも街道沿いで「二十三夜塔」と出会うことができた。



(新潟県魚沼市 神湯温泉・筆者撮影)

古事記において、月読命（ツクヨミ）は、アマテラス、スサノオと共にイザナギの禊から生まれた三貴神のひとつであり、月を司る、または夜を統べる神として崇められ、月の暦を数える神と評されていた¹²。また、月は「ツキ」の同一音であることから、運を呼び込む神とも考えられた。「月が変わる」と「ツキが変わる」は、日本語の掛詞表現だが、気分を新たにすれば、「なにかいいことがあるかもしれない」という期待を含意しているのではないだろうか。

それ故、飢饉、疫病といった社会不安に苛まれていた平安後期から鎌倉時代にかけて生まれた浄土宗誕生背景と、室町時代から江戸時代にかけて二十三夜信仰が浸透した理由との関係性には興味深いものがある。

4. 昔話における「二十三日」

1975年から放送されていた「まんが日本昔ばなし」において、二十三日が描かれていることも興味深い。確認できたものは2話あり、舞台は沖縄県と群馬県沼田市であった。沖縄を舞台にした「二十三日さま」の語り始めは、「むかし、沖縄で話じゃった。その頃は、月の姿が半分に見える二十三日様には、親子、兄弟、近所の者、みな一つ所に集まって、お月様を拝み、食事を共にし、夜通し語り合ったものじゃ」から始まる。

群馬県沼田市を舞台にした物語は、夜道に化け猫に襲われる中、二十三日の石碑を拝み、その月の光によって主人公は守られるという話である。「日頃から信心をしておった二十三日様に、危うく命を助けてもらったのじゃった。こうして旅人は二十三日の月の光に守られ、無事に桐生の里に帰ることができたのじゃった。そしてそれからのちも、二十三日の月待の夜には、必ず家族と一緒に、お三夜様のお祭りを欠かすことはなかったということじゃ」で締められている¹³。この話からも、深夜、徒歩で移動せざるを得なかったとき、道端の二十三日塔は道しるべでもあり、旅人の大きな支えになっていたと想像できる。



(画像引用：まんが日本昔ばなし～データベース～)



(画像引用：まんが日本昔ばなし～データベース～)

ここで描かれている沖縄においては、「琉球神道」、「商売の神・金銭の神」として信仰される関帝をジューサンヤ（十三夜）に祀る風習もあり、月を祀る事例が数多く存在している。この二十三日信仰との関係性についての調査は継続していくものとする。

5. 江戸時代以前における「講」の地域コミュニティと、現代コミュニティ

二十三日信仰を支えた「講」という仕組みが生み出された理由には、日本の農耕と深いつながりがあるといえる。国家成立時においては、公地公民という考え方の下、中央集権体制が作られていったが、墾田永年私財法の成立後、土地所有権は、「不入の権」と呼ばれる治外法権的且つ個人所有権となった。この私有地が後に荘園として肥大化し、守護大名の発生基盤となった。更には、国家の統治権が及ばぬ私有地の存在は、戦国大名を核とした小国家群を生み出す一方で、一般庶民階級では家長が土地を守るという考えのもと、様々な相互自助のためのグループが誕生していった。

社会的講は地域の共同生活が反映し、相互扶助による契約講、労働力交換のゆい、モヤイ講、年齢別の子供講、若者講、老年講、葬式組の無常講、性別によるカカ（嬬）講、娘講、尼講など、また金品の融通をはかる経済的講は、頼母子（たのもの）、無尽（むじん）、模合（もやい）などとよば

れた¹⁴。

沖縄の「もやい」は今も存在し、毎月、メンバーでお金を出し合って積み立て、半年に1回、または1年に1回の「親」の順番が回ってきた際、そのお金を総取りする仕組みである。毎月「飲み会」を行うのが一般的であり、飲み代は積み立てるお金とは別に支払いつつ、家族や仕事とは異なるコミュニティを形成している。

（むじん：無尽）とは、社会的ネットワークである。「無尽講」と呼ばれる相互扶助組織は、わが国において中世（鎌倉時代）以来、全国各所で行われていたが、特に、山梨においては今も盛んに行われている。現在の山梨県で「無尽」と称して行われている会合の多くは、5～10人程度の定期的な飲み会、食事会である。同窓会的なもの、コミュニティ内でのもの、気の合う仲間同士のものなどがあり、飲食をしてコミュニケーションを取る情報交換の場として機能している。

庶民相互の金融組織として、全国各地に「無尽」を生業とする会社が明治時代になると出現し、三菱UFJフィナンシャル・グループの日本住宅無尽株式会社は、100年以上の歴史を持つ日本唯一の無尽会社として現在も存在している。

この無尽に関する興味深い調査結果がある。山梨県民の介護や支援を必要としない自立期間は、全国でもトップクラスである。山梨大学が県内の高齢者を8年間追跡調査した結果、その理由の1つとして「無尽」を挙げている。同大学の調査によれば、日常生活動作能力を維持する確率が、「無尽に3つ以上参加している」人は「全く参加していない」人と比べて2.4倍高く、さらに「無尽が楽しみ」の人は「楽しみではない」人の6.7倍も高い。無尽を「楽しく・数多く」行っている高齢者ほど、介護を受ける確率が少ない¹⁵。また、（むじん：無尽）は元々仏教用語であり、梵語アクシャヤ（aksaya）の漢訳で、仏の教えや菩薩の教化がいつまでたっても尽きないことをいう。

このような形で作られていた「講」の仕組みは、近代文明社会と、都市部への一極集中によって、その縛りを弱めていった。その理由の1つとして、明治期に旧暦から太陽暦に切り替えられたこともあるが、東京や大阪といった大都市への集中による地域コミュニティの崩壊もその要因であろう。

二十三夜講については、茨城県土浦市で今尚その行事が続けられている。土浦市小松ヶ丘町の国道125号線沿いにある細い石段を登りきった高台に勢至菩薩を祭る小松二十三夜尊（勢至堂）があり、講では現在15人が毎月旧暦23日の縁日に本尊を御開帳し、お茶や談笑を愉しんでいるという¹⁶。

地縁血縁という紐帯原理は社会形成において重要であり、江戸時代以降も地域形成の核となっていたという歴史的事実を踏まえ、その長短所を弁えながら、新しい地方創生を考えている。親戚付き合い、ご近所付き合いがなくなりつつあるのは、煩わしさといったデメリットに目が行きがちだからである。しかし、改めて地方活性化の基本方針における「稼ぐ地域をつくるとともに、安心して働けるようにする」という点に鑑みたとき、「講」という組織形態の中に、その光明を見出せるのではないかと考える。家族や職場での人間関係ではなく、またPTAや自治会のそれとも異なる、利害関係もストレスもない関係性が求められているのは、SNSの隆盛を見れば明らかである。「煩わしい関係よりも、個の尊重」と叫ばれた結果、人が手にしたものは漠然とした不安感ではないだろうか。若者たちの中には、裏垢と呼ばれる、匿名の別人格を名乗ったアカウントでのコミュニケーションに、自己表現を求めている者も少なくない。

6. おわりに

以上より、地方創生に取り組む上で、①家族・血縁、②職場、自治会（地縁）、③新しい人間関係（第3のコミュニティ「講」）と定義し、この

サードコミュニティ構築について、更なる深掘りを行い、令和の時代における新しい「講」を、「地縁血縁を超え、目的ごとに集うユニット」として再定義し、今後取り組んでいく所存である。

先日、只見町において、地方創生を考えるワークショップを開催した。そこには、役職も年齢も立場も関係ない、様々な背景を持った方々が集まった。自分たちが当たり前だと思っていた食習慣や、観光名所になりうる伝統行事などを笑顔で発表し合う姿に、私は現代の「講」を見た。



(只見町ワークショップ・2021年12月10日・筆者撮影)

地方創生は、その地区単体で取り組んで解決を得ることは容易ではない。先人たちが月待信仰という名の下に、その「場」を作り上げ、コミュニケーションを継続的に取り続けていたことに、1つの答えがあると考えます。「講」の枠に「月」という1つのベクトルに心寄せ合っていたように、地方創生の定義を踏まえ、「各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生する」ことを、先人たちの知恵から学び、より良き方向へと導いていきたい。

今後は、各自治体とその地域に根差した各大学が協力しその知見を生かして、「多様な人材の活躍を推進し」「新しい時代の流れを力にする」ことを目指す産学連携が重要な役割を果たすことになるだろう。

引用・参考文献一覧

- 1 山形新聞2018年5月18日朝刊
- 2 NHK News 2019年12月22日
- 3 山形新聞2021年3月19日朝刊
- 4 内閣府地方創生推進事務局 まち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」「総合戦略」「基本方針」
- 5 ITビジネスオンライン 福島・只見線復旧問題——なぜ降雪地域に鉄道が必要なのか 杉山淳一の「週刊鉄道経済」(2015年12月18日)
- 6 香港サウスチャイナ・モーニングポスト紙(2021年2月8日)
- 7 英テレグラフ紙(2019年10月31日)
- 8 只見町観光まちづくり協会HP
- 9 「浦和太田窪と周辺の四方山話」善前自治会
- 10 安藤希章「神殿大観」
- 11 江戸名所図会(国立国会図書館デジタルコレクション)
- 12 Discover Japan 日本人なら知っておきたいニッポンの神様名鑑
- 13 まんが日本昔ばなし～データベース～
- 14 株式会社平凡社世界大百科事典 第2版
- 15 公益財団法人山梨総合研究所
- 16 常陽リビングニュース(2017年5月2日)

